新幼稚園と保育者の自己再教育

（時　　言）

○教育の新制度と共に、教員が新らしくならねばならぬことは勿論である。このために、その資格標準が革められようとして、新幼稚園教員は新制大學において二年の過程を、教職課程と共に修了したものということになる。二年の過程というのは、下の標準であつて、教員はすべて大學（四年）の卒業生でなければならぬという原則的標準としては、幼稚園教員も亦同じである。

○ところで、これはその制度が完成せられた上で求められることで、少くもこゝ數年は、少くも形式上その通りの先生は出ない。しかし、幼稚園は新制のもとに現に行われているのである。新しい先生の出るまで休んでいるのではない。こゝに實際の問題が起る。

○これに對して、理論的に徹底させれば、從來現在の先生の資格再審査をして、新しい高い標準に適合した人(恐らく少數の)だけを新らしい先生とするということになる。が、そんなことは出來ない。出來ないというには二つの理由がある。理由の一つは、そんな少數の先生では、現在の幼稚園の間にあわぬ。それなら、その再審査に合格しない人は準保姆とすればという考えも出る。しかし、それこそ大きな問題を含んで來る。第一、今まで正保姆であつた人を、制度の革新とはいえ、急に準保姆に下げることが、教育者に對して適切な遇し方であろうか。それも、再審査の方法が、眞に幼稚園教育者としての全面的本質的適否をきめ得るものならば、とにかくそういう方法は容易にない。永年の實際經驗の結果、幼稚園教育者としてどんなに深い價値を身につけているかは、一寸した審査方法では測れない。その間の一般的教養にしても、心がけのある人なら、大學二年の教養位、その何倍もの年月の間にはいくらも得られるのである。

○たゞ新しい幼稚園の先生として、新教育に關する充分の理解だけは、それこそ新らしく理解して貰わねばならぬ。その意味においての再教育は、國からいつてもその人自身からいつても、是非必要である。これは、國として努力しなければならぬことであり、その人として心から意を用いなければならぬことである。

○さて此の場合、國の努力と先生方自身の用意と、どちらが先きになるべきものであろうか。私のいゝたい點はこゝだ。そうして、勿論、先生の用意の方が先きであるべき筈だと答える。新幼稚園を是認した限りそうして、そこで働く限り、自分をそれにぴつたり合致するものに再教育することは、教育者としての責任であり、義務であり、良心である。國の努力というのもその先生方の自己再教育を手傳うためにすることである。

○前に再審査について言つたことも、現に先生である人の、その良心を信頼し尊敬するからである。